

『ミッキーはなぜ口笛を吹くのか：アニメーションの表現史』

細馬宏通著／新潮社

40年以上も前のこと。子供の頃、すぐ近所の千里セルシーというところで視聴者参加型の公開番組をやっていた。司会者は横山プリンとキャッシー。「まいど、おいど、プリン、ハゲー」と横山プリンと視聴者が掛け合いながら番組が始まった。その中に、素人が出てきて口パクと振り付けで物真似をする『パクパクコンテスト』というのがあった。山本リンダの『狙いうち』の「ウツララー、ウツララー、ウラウラでー」に合わせて登場する素人、ブルース・リーの「燃えよドラゴン」のテーマ音楽に合わせ、ヌンチャクを振り回しながら口パクで「アチャー」と怪奇音を上げる素人、大阪のハジケ素人達がそこに集まっていた。誇張された口の動き、顔の表情、体の動き。オリジナルの人物の特徴をつかみ、なおかつ誇張することでオリジナルから逸脱、オリジナルに抱く視聴者の固定概念に亀裂を生みだし、笑いの渦に誘ってくれていた。

こんなことをふと思い出したのは、『ミッキーはなぜ口笛を吹くのかアニメーションの表現史』という本を読んでいたときだった。今日では映像と声同期するのは当たり前のことだが、アニメ創成期における、声のない映像から声のある映像に移行する過渡期において、映像と声の同期をどう図るのが解決すべき困難な課題となっていた。その初期の試みの一つが1928年制作の8分に満たないサウンド・カートゥーン (Sound Cartoon)、ミッキーマウスのアニメ『蒸気船ウィリー Steamboat Willie』だった。ネット上で見てみると、ミッキーマウスは息を吸い、口を大きく膨らませ口笛を吹き、他の動物達の口を主に楽器代わりに演奏している。その音の数々とシンクロする体の様々な動きに当時の観客は魅了されたのだろう。

更に秀逸なのがフライシャー兄弟制作による、これも8分に満たないアニメ『ミニニー・ザ・ムーチャー Minnie the Moocher』(1932)だ。これもネット上で見てみると、冒頭実写で演奏をバックに、マイケル・ジャクソンのような脱力した浮遊感のあるスローテンポな掴みどころのないステップを踏む、偉大なジャズシンガー、キャブ・キャロウェイが登場。その後にアニメに切り替わり、親にがみがみ叱られ、家出をする主人公ベティ・ブープのシーンが流れ、そして彼女が迷い込んだ洞窟に手足の長い、腹の出た薄気味悪いセイウチが現れる。そのセイウチ

は冒頭のキャロウェイと全く同じ体の動きをし、ステップを踏みながら踊り、かつ口を動かし歌うのである。この精巧な脱力系の動き、口と声のシンクロ、リップ・シンクを可能にしたのが、フライシャー兄弟が発明した、人の動きを写し取る技術「ロトスコープ」(1915年)と実写から人の口の動きを写し取る技術だったのだ。ここにアメリカのアニメーションにおける口と声の同期へのこだわりの淵源を技術的に辿ることができる。

現代においてもアニメ「アナと雪の女王 Frozen」の主人公エルサが「Let it go ありのままに」を歌っているときの口の動きと声の正確な同期と、そのパワフルな効果が確認できる。口こそが声の源なのであるから、同期を取るのは当然であろう。だがしかし、アメリカのアニメと見比べると、日本のアニメは口と声の同期が実にいい加減だ。息継ぎのタイミングが合っているだけで、発音と口の形の同期は正確には取られていないのである。アニメ大国の日本であるのに、これは非常に驚くべき雑さである。だが、この雑さを我々は当たり前にも思ってきたのではないか。現に何の違和感もなく見ているではないか。だとすると、この口と声の非同期を基本にして、ある箇所だけ同期させれば、ある種の効果が生み出せると考えてもおかしくない。

例えば、大人気アニメ「妖怪ウォッチ」では主人公のケータが妖怪ムリカベに憑りつかれたため、人に何か頼まれても「ムリ～」と言って断ってしまう場面がある。それまで口と声の完全な同期がなかったのが、この時の「ム」と「リ～」は正確に同期し、しかも「ム」は通常よりも唇の丸めが強く、前に唇が異常に突出、更に「リ～」は日本語の舌尖を歯に当てて弾く発音ではなく、英語の舌尖を歯に当てたまま口を大きく横に開いて発音する1である。その時我々は、その口の形に視線が釘付けとなり、その言い方に非常に嫌味な憎たらしい印象を受けてしまうのである。

それでは、日本のアニメのように口と声の非同期を基本だとすると、逆にアメリカのアニメの口の動きとその正確さに違和感を感じたりはしないだろうか。だとすると、この違和感はロボット工学で問題となる例の、人に似せる過程で逆に何か変ではないかと感じる領域、「不気味の谷」と通ずるものがあるのかもしれない。

さて、このように両国のアニメの表現方法に関する違いについて考えてみるのは非常に興味深いことである。この分野に興味を持つ方には実際に手に取って読んでみることをお勧めする。アニメの持つ表現の魅力を技術的、歴史的、文化的に知るのに恰好な道案内になるのではないかと思う。

執筆者紹介

加納 満

基盤共通教育部准教授。専門領域は、言語学・日本語教育。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『ミッキーはなぜ口笛を吹くのか：アニメーションの表現史』細馬宏通著 新潮社
(新潮選書) 2013年 1,728円

【DVD】『アナと雪の女王 = Frozen』クリス・バック、ジェニファー・リー監督
ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン 2013年 3,127円

[ブックガイド目次へ](#)